

# 「明恵、死の誘惑」

—— 弥勒・観音・補陀落渡海 ——

古 田 雅 恵

はじめに／殉死としての明達入水

貞永元年（一二三二）七月八日夜、一人の尼僧が清滝川に身を投げて自死するという事件が起きた。その名を善妙寺の明達という。承久戦乱の折、後鳥羽院のもとで敗死した山城守佐々木広綱の室である。広綱との間にもうけた勢多伽の死をめぐる物語（「承久記」は乱世の〈母〉の悲哀を伝えるが、夫と子供の死後、明恵を頼り善妙寺によってその菩提を弔っていたのであった。この貞永元年という年、一月に明恵が入滅し、その後およそ六月末から十一月末にかけて、明恵を含む八人の善妙寺尼僧は古華嚴經六十巻を書写してその追善供養を行っている。いわゆる「尼經」がそれであるが、明達は自分の担当の冊を書了した七月八日未刻をその奥書に記し留め、その数時間後に自死したというのである。

その前後の事情について奥田勲は『華嚴縁起』<sup>(2)</sup>にふれながら興味深い解釈を明らかにしている。『華嚴縁起』義湘絵は烈女善妙の物語を伝える―聖教を求めて唐に入った僧義湘の美貌に執着してしまった善妙だが、僧の諭す言葉に邪心を翻して仏法に従い、後に彼が帰国するにあたっては自ら海に身を投げて龍身と化してその背に僧の舟を載いて扶けるとの奇跡を現したという。明恵がその深義を説くことを通じて尼僧たちに求めた内実は、我が入滅の期に及んでは一同も身を投げて龍と化し、我をその背に乗せて希望の地（弥勒都卒天）に運ぶべしとの教えではなかったかと奥田はいうのである。およそ善妙の物語は善妙寺尼僧たちにとって重大関心事であつたらしく、彼女らが師に対して多くの質問を寄せ、また明恵も深義を示すべく熱心に答えていることが縁起詞書に含まれる判釈の多さに知れよう。その問答の内容からは、明恵が女たちに対して、妄執を仏教に奉仕する大願と変え師の徳を信じて仏法実現のために

益あるならば善妙のような不思議も実現できると教えたと思われるのである。

明恵の教えが明達を幸福な自死に誘ったとの解釈になるうが、奥田は明恵周辺には彼女以外にも同様の自死者があることを指摘する。明恵入滅七日後に入水した明浄房慈弁と尊順房尊弁のことであるが、兩人の事績は次の『最後臨終行儀事』の記述にみえる。

①慈弁明浄房、尊弁尊順房、同時ニ逝去スル事 兩人ハ和尚ニ先タチテ死ヲ取ラムト云フ事、立願祈請シテ已ニ年序ヲ経、又数日ニ及ヘリ、慈弁ハ三ケ年ヲ経、尊順ハ百ケ日ニ満ツ云々、而ルニ和尚遷化シテ、和尚ノ遷化ニ先タサル事ヲ怨ミテ、兩人共ニ慍懃シテ、廿三日、梶尾ヲ逃ケ出シテ、同廿五日ノ曉ニ身ヲ鯨波ノ中ニ沈メテ志ヲ雙賢ノ跡ニ繼ケリ、彼ノ雙賢ノ弟子ハ仏ニ前タツコト七ケ日、今ノ両ケ仏子ハ和尚ニ後レテ七日ヲ送レリヘ中略、同三月二日、泉州ノ海浜ニ彼ノ遺骨ヲ尋ネ得テ同十一日ニ兩人共ニ之ヲ葬斂ス、爰ニ一人ノ法主比丘尼ノ禪惠房号弁上殿ノ即チ和尚ノ門葉ナリ、彼ノ二人ノ志願ヲ随喜シテ一体ノ弥勒像ヲ造立シ追善ニ備ヘリ（11オ、12オ、原漢文、／＼部分は割注、以下同様）

釈迦の雙賢弟子になぞらえて語られるところに、彼らの

自死が仏道にあるものの至極の純情として教団の人々の胸をうつものであったと窺われる。その追善供養のために弥勒像が造立されたと言られるとおり、明浄房、尊順房の自死は明恵自身も念願した弥勒都卒天への上生という文脈で理解されており、明恵とともに弥勒浄土に旅だったであろう二人の弟子に対する憧憬は、教団の人々の等しく抱く感慨であつたに相違ない。特に慈弁は、弥勒に対し奉つて入観し数日後に迫つた入滅に備える明恵を、その背後から抱き支えていたと伝えられる弟子である（引用②ノ施無畏寺藏本『高山寺明恵上人行状』<sup>5</sup>）。そのような彼らの入水が、周囲の人々にとつては、師とともに弥勒浄土へ赴いたとみえたであろうとは想像に難くない。

②シカル二十五日ノ初夜ノ時亥剋ニ、又威儀ヲトトノヘテ例ノ如ク弥勒ニ対シ奉テ坐禪ス、入観ノアヒタ数剋ナリ、出入ノ息ヲサマテ、有無ホトホトハカリカタク、身モヒエ身体アヘテ転動セス、慈弁後ニ語テ云ク、其間タ後ニアテ、カカヘ奉レルニ、出入息微細ニシテ有ト覚ヘス、其腹出入息ニヨテ運転アルコトナシ云々、然間タ入観ノアヒタニステニ入滅カト疑フ（施無畏寺藏本『高山寺明恵上人行状』いわゆる『假名行状』下68ウ）

本稿で筆者は明恵周辺の「死」について一考めぐらそう

とする。結論をいえば、明恵の弥勒上生信仰が、観音信仰や補陀落渡海と響きあいつつ周辺の人々を死に誘ったのではないかと述べようというのである。

### 殉死の背景

晩年の明恵、その周辺にとつては弥勒が殊に重要な仏であつた。明浄房、尊順房の追善として尊像が造立されたのもその一つの表れである。むろん、生涯にわたつて阿弥勒「専修」を排したように、明恵の立場が「諸尊諸行」にあつたといふまでもないが、『仮名行状』、上山氏藏本『高山寺明恵上人行状』（いわゆる『漢文行状』）<sup>6</sup>等は入滅に備えて弥勒を深く礼拝した明恵を語る。<sup>7</sup>

③同三年／辛卯／十月一日ヨリ年来ノ痔所労更発シ、又不食ノ氣ニ煩フ、同十日ノ夜、殊大事ナリ、仍臨終ノ儀ニ住シテ弥勒ノ像ノ御前ニ端座シテ宝号ヲ唱フヘ中略、夢ニ大海ノ辺ニ大磐石サキアカリテ高クソヒヘ立リ、草木花果茂鬱シテ奇麗殊勝ナリ、大神通力ヲモテ大海ト共ニ相具シテ十町許ヲヌキ取テ、我カ居所ノカタハラニサシツクト見ル、此夢ハ死夢ト覺ユ（『仮名行状』下46ウ、

『漢文行状』巻下19張にも同旨の記述）

④シカル二十五日ノ初夜ノ時亥剋ニ、又威儀ヲトトノヘテ例ノ如ク弥勒ニ対シ奉テ坐禪ス、入観ノアヒタ数剋ナリ、出入ノ息ヲサマテ、有無ホトホトハカリカタク、身モヒエ身体アヘテ転動セス、慈弁後ニ語テ云ク、其間タ後ニアテ、カカヘ奉レルニ、出入息微細ニシテ有ト覺ヘス、其腹出入息ニヨテ運転アルコトナシ云々、然間タ入観ノアヒタニステニ入滅カト疑フヘ中略、其時ニアタテ靈典見ニ、現ニ弥勒ノ大座ノ左ノ角ノ宝殊ノ上ヨリ香煙忽ニタチノホル、漸ク帳内ニミチテ、ツキニ御座ノ間タニタナヒキテ、雲ノ如クシテ空ニワキノホルヨソヲヒアリ、コノ時ニ弥勒ノ像動揺シテ空ノ中ニ浮ヒ出テ給ヘリ、ソノ時ニアタテ、上人ノ口ノウチヨリ白光イテテ弥勒ノ宝前ヲテラス云々（『仮名行状』下68ウ、70ウ、『漢文行状』巻下24張にも同旨の記述）

⑤右脇臥入滅ノ便宜ヲ設ク、コノ已前ハ西北ノ方ニ弥勒ノ像ヲ安置ス、彼ノ像ニ対シ奉テ端座シテ西北ノ方ニ向テ臨終ノ儀ヲトトフ、シカルニ右脇臥ノ便宜ニハ、期ニ臨テ房ノシツラヒ聊便宜ナラサルニヨテ、弥勒ノ像ヲハ傍ノ学文所ニ安置シ奉ルヘ中略、今ハ臨終ナリ、傍ニ安置シテ拜シ奉リタケレトモ、此事定テ後ノ人ノ規模トナリテ、我カ如クツツマサラム人モ、不浄ノ寝所ニ仏カキ入レマイラセテ、此等ヲ証トシテ彼モサコソアリシカナ

ムト申サムコトノイタハシクカハユク覚ユレハ、学文所ニ安置シ奉ルナリ、スナハチ五聖ノ曼荼羅ヲ東ニカケ奉テ、東ニ向テ南ヲ枕トシテ右脇臥ノ儀則ニ住、五聖者、毘盧舍那、文殊、普賢、觀音、弥勒也云々〔仮名行狀〕下73オウ74オ、『漢文行狀』巻下26〜27張にも同旨の記述)

⑥其右脇臥ノ体ハ右手ニ念珠ヲ持シ、左手ハ蓮華拳ニ作テ、身ノ上ニヨコタヘテ胸ノ間ニ置ク、右足ハ直クノヘタリ、左足ハ小キ膝ヲ屈シテ上ニカサネタリ云々、其後又音ヲアケテ南無弥勒菩薩ト唱給フ事数遍ナリ、其後又眼ヲトチテシツマルヘ中略喜海枕ニチカクシテ親聞クニ、ヒソカニ我戒ヲ護ル中ヨリ来ル云々ノ弥勒善財云、從淨戒処来、隨其所樂自在生故云々、釈云、実報從万行中云々、与此相似矣、思之ノ此最後ノ詞ナリ、其後ソノ形チ歡喜ノヨソヲヒ忽ニ顛レ、微笑ヲ含メルカ如クシテ奄然トシテ寂滅ス〔仮名行狀〕下82ウ〜83ウ、『漢文行狀』巻下31張にも同旨の記述)

病状篤くなりゆくなか弥勒像前に端座して宝号を唱え、ついに自らの「死夢」を得たと語る明恵を伝え(引用③)、また、弥勒像に対座して入滅に備えるうちに台座から香煙がたなびいて室内に満るなか、空中浮遊をはじめた尊像に

むけて明恵口中より白光が放たれた、そのような奇瑞を弟子一同が目撃したと伝える(引用④)のである。また、最後まで対面して護持を得たいけれどもやはり不浄の寝所に据え奉れば後の誤解を招きかねぬと恐れて尊像を学問所に移したというような、弥勒に対する格別の配慮を語る(引用⑤)のである。入滅を予感した明恵が弥勒に対して、以前にもまして著しい傾斜を見せたとの記述態度が明確である。

特に引用⑥などは、明恵入滅直前の景、その最期の言葉を弥勒が善財童子に語ったものになぞらえて理解しようとする。明恵と弥勒とを一体に感じようとする述べかたであるが、明恵が生きながら弥勒にまみえようという上生信仰を抱いていたことを、側近たちが充分に意識していたことの現れとして解釈したい。そのような意味においては「切利天」に転生するという予言を得たと自ら記した『明恵上人御夢記』<sup>8</sup>の記述は明恵にとって重要なものだったろう。

⑦一ツ、同シキ九月廿日ノ夜ノ夢ニ云ハク、大ナル空ノ中ニ羊ノ如キ物有リ、変現窮マリ無キ也、或ハ光ル物ノ如ク、或ハ人躰ノ如シ、冠ヲ著ケタルコト貴人ノ如シ、忽チニ反シテ下賤ノ人ト成リ、下リテ地ニ在リ、其ノ処ニ義林房有リ、之ヲ見テ之ヲ厭ヒ惡ム、予ノ方ニ向ヒテ将ニ物云ハムトス、予心ニ思ハク、是ハ星宿ノ反現セル也、

予之ヲ渴仰ス、願ハクハ不審ヲ決セム、即チ予ニ語リテ曰ハク、多ク人ノ信施ヲ受クヘカラス、即チ之ヲ領ス、予問ヒテ云ハク、予ノ當來ノ生処ハ何レノ所歟、答ヘテ曰ハク、忉利天也、問ヒテ云ハク、彼ノ天ニ生シテ已ニ五欲ニ就著セスシテ、仏道ヲ修行セム歟、答ヘテ曰ハク、尔也、天ニ云ハク、尔ハ頭ヲ焼クヘカサル歟、答ヘテ曰ハク、尔也、心ニ思ハク、後生吉クシテ、此ヲ志サハ何ニテモアリナム、現世二人ノ前ニテ、何トモ在ルヘクハコソハト云ハルト思フ、又白シテ言ハク、常ニ此ノ如ク護持セシムヘシ、答ヘテ曰ハク、尔也、即チ覺メ了ヌ

(第十篇 承久二年条 訓読は底本の読みにしたがう)

四十八歳の秋、夢に羊のような存在の中空に浮かぶさまを見たというのである。それは靈魂のようでもあり、人のようでもあり、あるいはまた冠を戴いた貴人かと思えば下賤の人と刻々とその姿を変える。やがて明恵は彼が星宿の現れであることを感じ取り、自らの行く末を尋ねかけ、また今生の守護を乞う。地に降り立ったそれは、明恵を常に守護することを約し、また明恵当來の生処が忉利天であることを告げたというのである。弥勒淨土第四天への上生を願うものにとつて、第二天忉利天への上生の予言は心強いものだったに相違ない。また都卒天へ上ったとの夢もいくつか残されており(『夢記』第十篇16オ・承久二年六月条、

同22ウ・同年八月条など、そのような話題は側近たちには親しく語られたところであつたらう。

### 観音來迎説の派生

入滅に備える明恵周辺で弥勒がことに重要な仏と意識されたにしても、その外周の人々が聴き及んだ「風聞」のうちには多少の飛躍を許容しているものがある。たとえば『最後臨終行儀事』は明恵入滅前後に諸人に現れたさまざまな奇瑞を語るが、そこには行状系や伝記系の明恵伝に語られないような話題も多い。あるいは後日の仮託の類も含まれようが、そのなかには、次の記述のように、明恵の入滅を観音信仰と関連させて理解しようとする向きのあつたことが見受けられる。

⑧松尾勝月房上人ノ夢記ニ云ハク、寛喜四年正月十九日辰ノ刻ノ行法正念誦ノ時ノ夢ノ如ク幻ノ如クシテ人有リノ其ノ鉢ヲ見スノ告ケテ云ハク、明恵上人十八日酉ノ刻入滅已ニ了ヌト云々、覺メテ後チ、物ヲ吞ムカ如シ、而シテ十九日ノ暮、今日巳ノ刻御入滅之由ヲ聞ク、而ルニ之ヲ情ラ思フニ、十八日酉刻ハ観音來迎ノ瑞歟、内院ニ上生シテ必観音來迎歟、摩訶止観ニ天台大師ノ臨終ヲ説キテ云ハク、大師ノ生存ニ常ニ都率ニ生ムト樂ヒキ、臨終

二乃チ云ハク、観音来迎スト云々（14オウウ 原漢文）

松尾勝月房の夢に某が現れて明恵の入滅を予言したといふのである。現実に明恵が入滅するに及んで、やはり弥勒都卒への上生を願った天台大師が臨終を迎えた際に観音の来迎を得たとの摩訶止観の記述に思いをはせながら、勝月房は、明恵のもとへも観音の来迎して彼の上生がかなったに違いないと語るのである。ここに見える勝月房とは天台寺門の松尾慶政上人のことであるが、彼は明恵の百ヶ日忌にあたって催された供養に導師を務めてもいる。また同書「天変事」項にも明恵の入滅を予感する彼の言葉が記されている。

⑨同正月十二日、松尾慶政上人ノ許トヨリ告示シテ云ハク、正月三日、聖ノ世ヲ避ル天変出現セリ云々（9オ）

勝月房は明恵の入滅前後に一定以上の役割を演じたといふべきだが、そのような人物の言として観音来迎が語られたことに留意したい。慶政自身が篤い観音信仰者であったが、明恵やその側近たちの意識した都卒天上生とは別に、その外周に観音来迎という側面に重きをおいて明恵入滅を理解しようとする文脈が生じているものとみたい。

そのような「風聞」の派生には師匠筋にあたる文覚との

関わりもなにかの役割を担っている。たとえば『平家物語』は、熱烈な不動行者であった文覚が嚴寒の熊野に詣り、那智の滝壺に首までつかって不動明王の呪を唱え続けてついに大願成就した奇跡を伝える。文覚のような不動行者たちの実態、当代の熊野観音信仰のありようについては速水侑らが詳しく述べているが、彼らのような山岳修行者たちは不動明王とともに観音をも篤く供養していたという。事実、文覚にかかわって明恵周辺が観音と弥勒とに尊崇を及ぼす信仰のありようについて、『高山寺縁起』<sup>10</sup>に次のような記述を見ることができる。

⑩一、金堂一字／檜皮葺、五間四面／右、本堂ハ高雄文覚上人、當初草創セシメラルト雖ヘドモ其ノ功未ダ終ヘズ、而ルニ明恵上人之ニト居シテ諸大檀那等ト各々力ヲ励マシ、面々助成ス、門弟喜海、靈典等、専ラ土木ノ勤メラ致ス、遂ニ成風ノ功ヲ終フ、本仏、中尊、木像周丈六盧舍那如来／仏工運慶作／、脇士、十一面観自在菩薩／相伝ニ云ハク、傳教大師御本尊ト云々、或説ニ、弘法大師御作ト云々／、弥勒菩薩（中略）抑モ文覚上人、當初、明恵上人ニ語リテ云ハク、母尾道場ニ運慶所作ノ釈迦如来像ヲ安置シ奉リテ、華嚴宗ヲ興行シ奉ラシメヨト云々、裏昔ノ一言ハ今ノ事ニ懸ケ協フ、願望ハ自然ニシテ成スル歟、知ラス、又上人ノ立筭歟、旁以テ規模ニ足ンヌノ

ミ、左右ノ脇土、観音ハ古仏之ヲ修復ス、弥勒ハ新タニ造ル也（『高山寺縁起』2オ〜3オ 原漢文）

高山寺金堂の縁起を述べるくだりであるが、文覚がみずから弟子と頼む明恵に命じて、華嚴宗興隆のために堂を完成させて釈迦・観音・弥勒の三尊像を安置せよと語ったとの記述である。明恵周辺の人々が遺命の達成のために尽力した様子が語られる。釈尊の脇侍といえは文殊、普賢が通例だろうが、そこに弥勒、観音が用いられる点に明恵周辺の信仰のありようを見るべきだろう。<sup>⑪</sup>明恵の弥勒信仰に観音が色濃く重なるって理解されるのも予想されることである。

### 観音来迎説の縁源(1)／明恵生誕と観音

それにしても明恵入滅に観音を見たという「風聞」の由縁は、実は明恵の行状のうちにあるというべきで、たとえばその生誕をめぐる記述は観音を強く連想させる。『仮名行状』は次のように述べる。

⑪ 其母四条ノ坊門高倉ヨリ六角堂ノ万度マウテヲ企ツ、其間一万巻ノ観音経ヲヨミテ勤トシテ我カ後生ヲタスケ仏弟子トシテ尊トカラム子息ヲ給ラムト祈請ス、風雨ヲハハカラス、寒熱ヲイタマス、一心ニ此事ヲ祈請スルトコ

ロニへ中略（『仮名行状』上1ウ〜2オ、『漢文行状』1張にも同旨の記述）

母が六角堂に万度詣を企画し、その間、観音経一万巻を誦誦して懷妊を得たとの旨であるが、六角堂は観音信仰と関わってとかくの説話を有する場である。たとえばそこに安置される如意輪観音は聖徳太子が海辺で拾ったものであつて、それこそ彼が前世で護持していた仏であつたといふ。<sup>⑫</sup>ちなみに聖徳太子の生誕が観音の功德によるものとの説話は広くみられるものであつて、考えてみれば明恵懷妊のエピソードは、六角堂の観音信仰を背景として聖徳太子と明恵との同一性を想起させる機能もあるかもしれない。<sup>⑬</sup>ともあれ明恵生誕を観音との関わりで理解しようとする意図を見て取りたい。

同箇所につき諸本の記述を眺めれば、それらは観音の姿をより鮮明に描出する方向にある。たとえば引用⑫では「願ハクハ大慈大悲」と観音に直かに呼びかけるようになっているし、引用⑬⑭は「女人無知ニシテ」との表現が女人さえ救済するとして観音の大慈悲を強調することになる。引用⑭は「女人ハシ無智ニシテ」と強調がより大きからう。書写の問題もあつて即断すべきではないが、このような傾向は、およそ明恵教団が祖師生誕と観音の関わりを意識的に語る視点になつていたことを思わせはする。

⑫亦母六角堂観音詣日経堂遶事万反、其間普門品誦祈請云、我受難人身雖得女人ハ必人身ヲ失却セン也願大慈大悲、我後世助程子一人タヘト精誠至祈念〔梅尾明恵上人伝〕<sup>14</sup>上2オ)

⑬又母六角堂ノ観音ニ詣シテ経テ日ヲ遶ルコト万反・其間普門品ヲ誦ス祈請シテ云・我レ受カタキ人身ヲ得タリト云トモ・女人無知ニシテ必ス人身ヲ失却セン・願ハ大慈大悲我後世ヲ助ル程ノ子一人タヒタマヘト精誠ヲ至シテ祈念ス〔梅尾明恵上人伝〕<sup>15</sup>上1オ〜ウ)

⑭又母氏者 伝記云又母六角堂ノ観音ニ詣テ日ヲ経テ堂ヲ巡ル事万反、其間普門品ヲ誦シテ祈請シテ云、我難受人身ヲ得タリト云トモ女人ハシ無智ニシテ必ス人身ヲ失却セン、願ハ大慈悲之我後世ヲ助ル程ノ子一人タヒ給ヘト精誠ヲ至シテ祈念ス〔高山寺明恵上人行状抄〕<sup>16</sup>上2オ)

### 観音来迎説の縁源(2)／『摧邪輪』執筆と観音

観音との深い関わりはその生誕時ばかりでなく生涯を通じて語られるが、そのなかでも最も注意すべきものが次の『仮名行状』の記述である。

⑮一建暦二年ノ壬申ノ秋比ヘ中略ノ摧邪輪三卷高山寺ニシテ同年十一月廿三日コレヲ撰出畢ヌヘ中略ノコノ中ニ一ノ夢云ク、上人コノ書ヲツクルアヒタニ、一人来テ筆ヲトテ、上人ノ面ニ観音ト書ク、又一人アテ善導ト書クト見ル、又西方ヨリ金色ノ光名来リ照スヲ見ル云々〔仮名行状〕下1〜4オ、『漢文行状』巻下1〜2張に同旨の記述)

念仏専修と対峙する明恵にとつて『摧邪輪』三卷の撰出は極めて重要な戦略であつたが、その完成に際して、夢に人あつて明恵の額に観音の名号を書きつけ、その直後、西方よりの御来光に与つたというのである。以下に示すように「仏の名号を戴く」とは象徴的な儀式なのであつて、自身と観音との一体感を誇示し、もはや仏菓は保証されたと言言する自信に満ちた明恵の姿を見て取るべきである。

仏の名号を戴くとの表現は明恵の物語に何度か現れるが、次の『仮名行状』の記述は文殊菩薩との一体感に関わる。

⑯幼少ノ昔、文殊ヲ師トシテ大智恵ヲエムト祈請シ始シヨリ、ツイニ終焉ノ期ニ至マテ、其志カハル事ナシ、然レ者或ハ夢中ニ異僧神人ニ対シテ法ヲ受ケ、或ハ現ニ文殊ヲ見ニ迄ヘリ、又上人其昔夢ニ一人アテ、諸人ノ額ニ文殊ト書ヲミル、上人ノ所ニ来テ其面ヲミテ、御坊ハ元自ノ



文殊ナレハ、書ニ及ハスト云ト云々〔『仮名行狀』上57オ  
建久六年比条〕

文殊との結縁を「額に名号を戴く」というセレモニーを通じて表明しようというわけであるが、明恵はもとより文殊自身であつたのでその儀式に及ばなかつたというのである。明恵は生涯にわたつて篤く文殊を信仰したが、その特徴は「非人」救済の事業への参画を通じて自ら文殊菩薩と一体化しようというような念願のありようである。引用⑩はそのような志向のなかで語られたものの一つである。名号を戴く行為が仏との一体感をいうのに象徴的に意識されているのを見て取れよう。引用⑪のうち「又上人其昔夢二」以下は実は『漢文行狀』（巻上17張）に見えず、あるいは『仮名行狀』編集時の増補とすれば、「名号を戴く」行為の重要性を明恵同様に教団の面々も広く意識していたということになる。

また河合隼雄が「母子一体の境地」と表現する<sup>⑮</sup>ような、明恵の仏眼仏母尊に対する思慕のひとつなりなものでなかつたことは例の高山寺蔵仏眼仏母像に書付けた歌と言葉な<sup>⑯</sup>どにあきらかであるが、次の『仮名行狀』の記述もそのような一体感の表明である。

⑰一心ニ仏眼ノ明ヲ誦ス、夢ニ見ル、天童殊勝奇麗ノ宝ノ

コシニノセテカキアルキテ仏眼如来仏眼如来ト云、我ス  
テニ仏眼トナレリト思フ云々（上22ウ）へ中略へ夢仏眼  
如来ヨリ一通ノ消息ヲ給、ソノ表書ニ明恵房仏眼トカカ  
レタリ、披テ是ヲ見レハ殊勝不思議真字ヲモテ書レタリ  
へ中略へ如此ノ好相等ハ我生死ヲ出テ成仏ノ位ニイタラ  
ムマテ、併仏眼尊ノ御加被力ニ依テ成就スヘキ瑞相ナリ  
云々〔『仮名行狀』上25オウウ〕

仏眼仏母尊から頂戴した手紙の宛名が明恵房仏眼とあつたという夢であるが、やはり、尊名を戴くことが仏との一体感を象徴するという発想の類似を見て取れよう。

このような象徴的な意味からすれば、引用⑮は『摧邪輪』撰出をつうじて観音が明恵のうちに宿つたと称揚する意図のもとに語られたと見るべきだろう。念仏専修を排するのは観音の意志であると宣言しようというわけである。

そのような意図的な観音称揚の果てに、明恵が観音の来迎を得たとの「風聞」の生じることは当然ありうることであつて、すなわち、そのような「風聞」においては、まさしく観音に依つて生を受け、観音との一体性を誇り、そして観音に看取られて彼岸に旅立つたという「首尾一貫」した物語が完結するからである。

あるいは明恵教団の目論見もあつたかもしれない。当代の観音信仰が不平貴族の来世欣求として機能していたとの

言説<sup>②0</sup>がある。おおかた十世紀前後から、体制に疎外された没落貴族たちの信仰の大勢は来世欣求の浄土教に向かいつつあったが、来世欣求は阿弥陀信仰だけでなく、むしろ最初は阿弥陀仏よりも古い信仰の歴史を持ち貴族達にとつてもっとも親しい菩薩であつた観音信仰による場合も多かった。また観音信仰じたいも元々は追善や現世利益の面が大きかつたが、貴族社会の支持を得るため来世信仰の性格を加えつつあつたのである。

そのような状況の中に先ほどの明恵伝の文脈をおいてみると、その観音称揚が対念仏専修のストラテジーとして機能したということもありえぬことではない。明恵は念仏宗に対して、たとえば『摧邪輪』の著述といい「三時三宝礼」信仰の創出<sup>②1</sup>といい、法然らの活動を強く意識しながら時にきわめて厳しい対峙関係を探りながら自身の宗教活動を展開したが、彼らは来世欣求としての観音称揚を通じて阿弥陀専修に抗しようとしたのではなかったか。阿弥陀の脇侍を大いに称揚することによって阿弥陀専修を無効化していくという「諸尊諸行」の戦略を読みとろうとは穿ちがすぎるといふものか。

そのような目論見の有無はともかくとして、その生誕や主著撰述といった重要な話題を語るにあたつて観音が強調されたことが、その入滅前後にあたつても観音の姿がそこにあつて不思議でないという理解を生み、明恵が観音の来

迎を得たに相違ないとの「風聞」を呼んだといえようか。

### 明恵の観音像

さて明恵自身の観音に対する宗教的な感覚はその講義ノ一ト（其聞書）たる『光言句義釈聴集記』<sup>②2</sup>に窺うことができる。

①②謂観音前蓮華是所詮義／文／此ノ甘露滂ノ蓮華ハ光明真言ノ義、明王ハ是教鉢、サレハ此ノ蓮華ト明王トシテ真言ヲカサリタルナリ、サテ能詮ノ教ハ、不空羂索ト云ハ仏ノ大慈大悲ヲ以テ諸仏ノツナニシタルナリ、サレハ此ノ真言カ観音ヲツクリタルナリ、観音ヲ加持スルハ是一切衆生ヲ加持スルナリ、余レハ此ノ観音ト云ハ一切衆生ヲ合シテ一ニシテ観音トス、サテ一切衆生此ノ光明真言ヲ聞クニ功德ヲウルナリ／観音ヲ加持スルハ一切衆生ヲ加持スルト云ハ仏ノ大慈大悲ヲ受得スル物ヲハ皆ナ観音ト云ヘシ／中略／此ノ真言ヲ受持スル物ヲハ皆ナ観音ト云ヘシ／（下279～291）

すなわち光明真言のあまねく及ぶ功德を、観音を加持することを通じて一切衆生の供養がかなうことに比定して述べる条である。光明真言が観音を「ツクル」との理解に留意したい。その深義は難解であるが、同様な記述がまた別

に現れていて、明恵にとつてそのような感覚のきわめて意識的なものであったことが窺われる。次に示す『真聞集』<sup>23</sup>の記述である。

⑲一為或人地藏開眼彼時御說法教刻其中二地藏菩薩ハ余ノ  
仏菩薩ニ異ナルコト候也一切ノ仏菩薩ハ画像木像依仏眼  
真言大日真言之加持力生身トナルコト真言功能左右ナキ  
コトリ但於地藏者不待真言功力ココニテカキモシ作モシ  
タルカ若ハ画若木若ハ好醜悉ク迷途ニタカハスシテ済  
度ヲ垂給也（『真聞集』一22ウ）

その主意は地藏菩薩の事柄であるが、それに付して、画像の観音、普賢、文殊らがやはり真言によつて生身と化すとの理解が語られている。およそ引用⑱の「ツクル」とは「生身と化して顕現する」をいう。そのような理解はさらに次の『明恵上人御夢記』記述と重なるもので、明恵の観音信仰のありようを示唆しよう。

⑳一、同十月三日夜夢云、木像不空羼索観音即反為生身賜  
小卷大般若如法戴頭上流涙喜悅云々（第十篇 承久二年  
十月三日条）

すなわち生身と化した不空羼索観音に謁して大般若經を

下賜され喜悅する旨の夢の記録であるが、引用⑱⑲の記述を考え併せれば、真言加持を行いながらその奇跡によつて生きながら観音にまみえることもあるのだと明恵が強く念願したことを示しているよう。

そのうえで明恵の観音イメージが海に関わつて造形されていることを考えたい。

『華嚴經』入法界品に観音霊場を海に面した美しい山と記すが、石田尚豊は「華嚴系観音の道」を詳細に考証して、それらの信仰が中国普陀山、韓半島江原道観音窟、熊野那智山に連なっており、その背景に南海航海業者の存在を想定している。海に生きる人々の信仰としての華嚴系観音イメージをいうわけであるが、明恵に関わる記述のうちにもそのような面を見取ることができる。観音の功德のあまねく及ぶことを述べて「魚王」の「鱗族」を統率するに似ると比喩するような表現がある。次の『真聞集』の記述である。

㉑愛慢ハ是大悲体用ナリ愛ハ是観音ノ大悲愛菩薩摩竭幢ヲ  
持スルハ摩迦羅魚王鱗族ラスヘテノコストコロナシ菩薩  
ノ大悲衆生ヲツクスカ如シ（真聞集・本5オ）

明恵の観音イメージが海に接点を持つていることを窺わせるこの記述を、引用⑱⑲⑳の記述と考え併せるならば、

そしてそれらを明恵の激しい自毀志向の文脈<sup>25</sup>のなかに置いてみるならば、明恵周辺が抱いた観音イメージはほとんど補陀落渡海のそれに重なってくるのではないか。次のような『明恵上人遺訓抄出』<sup>26</sup>の言葉はそのあたりの問題に関わろう。

②②又云高僧等ノ神異ハ不可思議ニテサテヲキツ中々志シワリナキハ神通モナキ人々命ヲステ生ヲ軽クシテ天竺ニワタリ又仏法ヲモ修行スル殊ニアハレニウラヤマシ云々  
〔明恵上人遺訓抄出〕9丁

明恵が渡天竺を強く願っていたことは周知のとおりだが、ここに述べられる「命を捨て生を軽くしても渡天竺を志そうという凡下の人」のイメージは、まさしく補陀落渡海者の一群と重なりあっているよう。補陀落渡海者への憧れを「殊ニアハレニウラヤマシ」と明恵が吐露して不思議ないという周囲の理解から発した表現とみたい。

そのうえで『漢文行状』に次のような記述を見ると、ほとんど明恵が補陀落渡海を志向したのではないか、あるいは明恵の観音信仰が教団の面々にそのような祖師像を意図的に語らせたのではないかとさえ思われる。

②③建久ノ末ノ比、紀州ニ下向ス、湯浅海中ニ二嶋有リノ名

曰苜磨ノ、南北ニ相並ヒテ其ノ間ハ三四許丁、北嶋ハ東西ニ長ク南北ニ短シ、南嶋ハ南北ニ長ク東西ニ短シ、陸地ヨリ一許里ヲ隔チテ海中ニ峙リ、又、南北ニ二十許丁、鷹嶋久禮嶋等有リ、西南ノ角ニ當リテ遙カニ四国嶋ヲ見ル、正ニ西方ヲ望ムニ、海畔ト大虚ト相連レリ、西天ノ境隔テ無クシテ、恋慕ノ思ヒヲ通スルニ便リ有リ、上人ト道忠僧都ノ十八九才比也ノト并ビニ喜海ト、三人相ヒ共ニ彼ノ嶋ニ渡ルヘ中略ノ彼ノ嶋ノ西面ニ庵ヲ結ヒタル意趣ハ、観音ノ補陀落山ノ西面ヲ占ムルコトハ安養本所ノ事仏ニ帰順スルカ故也、彼ニ擬ヒテ西海渺茫トシテ五天ノ海ニ遙通ス、昼夜彼方ニ向ヒ、思ヒヲ本師釈尊ニ懸ケ奉ラムカ為也ヘ中略ノ今、海濱ノ景趣ニ准シテ彼ノ楞伽山ノ昔ノ儀ヲ想像ヤル、恋慕ノ心肝ニ銘シ、滅後ノ恨ミ腸ヲ断ツ、何レノ生ニカ紫金ノ姿ヲ仰キ、何レノ時ニカ生身ノ形ヲ拝ム、悲嘆ノ思ヒ境ニ触レ、忘ルルコト無し、又、或時、同法親族数輩ト相伴ヒテ海中ノ嶋ニ渡リテ、数日ノ間、止宿遊覧ス、遙カニ西海ヲ望ムニ、霞中ニ嶋有リ、擬シテ彼嶋ヲ天竺ニ擬シテ、屢ク礼拝ヲ作シテ唱ヘテ云ハク、南無五天諸国処々遺跡云々、長幼上下モ同シク此禮ヲ作スヘ中略ノ遂ニ海底群類、或ハ窟中、或ハ嶋上ニシテ、陀羅尼ヲ誦シテ魚鱗ヲ加持シ、仏因ヲ結ハシム、上人所持ノ真言集中記ニ云ハクヘ中略ノ願海中魚鼈鯨鯢螺鱗等衆生、必當来世々奉値遇大恩教主、永

可断愚癡業（中略）（『漢文行狀』中巻20～24張、原漢文、『梅尾明恵上人伝』などにも同旨記述）

観音補陀落山に意趣を求めて嶋の西面に留まり、そこから遙か天竺を想うというのである。昼夜遠く西天に向かつてひたすら釈尊を偲び、それはあるときには同胞や親族とともに行われたが、彼ら一同はともに釈尊を思慕するだけでなく同時に諸々の海の衆生を救済すべく真言陀羅尼を唱えさえるのである。明恵の釈尊思慕の念が感動的に述べられるくんだり、『行狀』の中でも特に華のあるところの一つであろうが、海に漕ぎいで嶋にあつて補陀落山にならいつつ、一族とともに海のものどもを賀ぎながら遠く釈尊を思慕するという明恵の姿は、まさしく現し世の観音菩薩といふべきか。教団はそのような祖師像を語っていったのであつた。

### 観音来迎説の展開

湯浅景基は明恵最初の修行地である白上山麓に一寺を建立し、それを明恵のために寄進したが、その落慶法要が行われた寛喜三年（一二三二）四月には「置文」を作つて、宗光を筆頭に「郡内一家」四十九人が一族連署をなしている。<sup>27</sup>その地は一族の結集の場となり、またその精神的なよ

りどころとして明恵崇拜が機能しはじめる。それは一族のアイデンティティとしてその結束を醸成し、やがて彼らは湯浅党として紀伊国内では守護職を凌ぐほどの繁栄を示すことになる。その寺に冠せられた「施無畏」の名は観音の異称であるが、明恵に対する帰依が観音信仰を背景として一族へ浸透していくさまを見て取るべきだろう。明恵の抱いた観音イメージあるいは教団の語つた明恵像が、観音補陀落渡海を強く連想させるものであつたことは、彼を一族のシンボルとして仰いだ湯浅党の面々にも大きな影響を与えたらう。もつとも明恵を養育した湯浅氏が熊野信仰に関わる氏族であつて、彼らの抱いていた熊野観音信仰が逆に明恵の方に響いた面もあるが、ともあれ観音をめぐる両者の関係について、たとえば『高山寺縁起』に施無畏寺の縁起を語つて次のように述べる。

#### ②4 巢原施無畏寺

右、此処者、上人練行之地、白上峯之麓也、森九郎景基ト此地、建立一堂、安置觀世音菩薩像、乃寛喜三年辛卯四月十七日囑請上人、展供養之梵筵、於彼巢原浦永禁斷漁獵殺生ノ業、擬供養之布施、依施生類之無畏、寺号施無畏寺、上人滅後、高信奉安置彼影像併施入三部華嚴、光明真言、加持土砂等、義林房寄付小田一処畢矣（高山寺縁起33ウ）

施無畏寺といえは醍醐天皇更衣藤原淑姫の観音寺とそこに安置する六観音像が思い出されるが、湯浅一統は堂内に安置し奉った観音尊像を明恵影像とともに礼拝するのである。布施として巢原浦での漁労を禁止して生類に無畏を与えようとするのである。裏返せば巢原施無畏寺一帯が有数の漁労地であつたことだろう。湯浅氏が熊野八庄司の一として熊野修験に従つて、その水軍の一翼を担つて最強の水軍力を誇る一党であつたというようなことは周知に属しよう。彼らは「海に生きる人々」であつた。明恵はそういう人々の観音信仰の象徴として生きることになつた。

そのような一統が補陀落渡海に鈍感とはもはや思いがたい。『吾妻鏡』貞永二年（一二三三）五月廿七日条に、三月七日に熊野那智浦から補陀落山へ渡つた智定房のことが鎌倉の伝聞として見えるが、智定房本名は下河辺六郎行秀、那須野巻狩に鹿を射損じた恥辱のために出家、熊野で法華経行者となつていたのであつた。この智定房の渡海事件を泰時のもとへいち早く通報したのが糸我庄地頭職糸我貞重、湯浅の一統であつたことは諸氏の説くところである。

明恵の観音信仰あるいは教団の語る祖師像は、その生涯にわたる自毀志向とあいまつては、紛れもなく補陀落渡海を志向してついに観音来迎を得たとの理解を一統の間に呼んだであらう。あるいは先の『漢文行状』の感動的な条を一族のものが目にしたならば、その文章は彼を観音補陀落

渡海へ駆り立てる「誘惑」と映つたろうか。

### おわりに／殉死としての実勝房渡海

湯浅氏実勝房の補陀落渡海はどのような文脈の果てに位置づけられるべきではないかと思う。実勝房渡海については根井浄が次のようなことを指摘する。

湯浅氏系図善本『湯浅系図』（上山勘太郎蔵）によれば、湯浅宗重―宗景―宗弘と続く宗弘の息に実証（ママ）上人弁海があり、「補陀落山渡畢」との注記が与えられている。天文十九年識語『四座講縁起』（二五五〇）は、明恵没後には実勝上人がこれを継いで建長八年（二五五六）まで勤修したが、年来の宿願によつて康元二年（二五五七）正月二十七日、土佐室戸津から一身一葉の舟に乗つて補陀落渡海を遂げたという（その事績は弘長四年（二六六四）湯浅宗業智眼が書いた『智眼置文』の一節にも伝えられているという）。

湯浅氏実勝房は高山寺蔵『五趣生死輪図』奥書にも名を残してもおり、また明恵の撰述した『四座講式』の後継者でもあつた。いわば明恵の法脈を継ぐべき人物が自死を遂げたというわけである。かつて明達尼らが明恵の後を追つて弥勒都卒天を指して逝つたように、実勝房もまた明恵の後を観音浄土に追つたのではなかったか。明恵の観音信仰

とそれに発する観音来迎の風聞、そして湯浅党の明恵への帰依、そのような文脈の中で実勝房は海を渡ったと考えた。筆者などには湯浅一統の篤い明恵帰依者には必然の渡海自死であつたと思われてならない。

それにしても、明達尼、明浄房、尊順房、そして実勝房と、明恵の信仰のありようが彼らを幸福な自死に誘つたとは言えまいか。「明恵、死の誘惑」という由縁である。大方のご批正をお願いする次第である。

## 注

- (1) 高山寺藏貞永元年写『大方広仏華嚴經』
- (2) 奥田勲(一九九七)「明恵と女性 華嚴縁起・善妙・善妙寺」(聖心女子大学論叢第八十九集)
- (3) 小松茂美編(一九七八)『華嚴宗祖師絵伝(華嚴縁起)』(中央公論社 日本絵巻大成一七)
- (4) 高弟定眞が寛喜四年三月に記し留めた。高山寺典籍文書綜合調査団編(一九七二)『高山寺資料叢書第一冊 明恵上人資料第二』(東京大学出版会 所収の高山寺蔵本(寛喜九年書写識語)による)。
- (5) 最も古形を残す明恵伝の一、高弟喜海が撰述したという「和字之記録」に若干の増補改訂を加えたものの、いわゆる「仮名行状」。高山寺典籍文書綜合調査団編(一九七二)『高山寺資料叢書第一冊 明恵上人資料第二』所収の施無畏寺蔵本(暦応四年教書書写識語上巻、鎌倉中期書写推定下巻)による。「和字之記録」から漢訳・整理

したという上山氏蔵本『高山寺明恵上人行状』(いわゆる『漢文行状』、鎌倉後期書写推定)などとの対照作業によつて増補改訂部分に配慮することができる。

ちなみに『仮名行状』の「慈弁(明浄房)後二語テ云ク……」以下の部分は『漢文行状』にはみえずあるいは後日の仮託とみるべきかもしれないが、「最後臨終行儀事」冒頭(一〇)には、明恵入滅直前の景を記して「幾ノ時尅ヲ経ズシテ即チ本処ニ帰リ入りタマヒキ、尚ホ未タ明相ノ程ハ現セサルナリ、即チ慈弁ニ寄リ懸ル(原漢文)」とあつて、やはり明浄房慈弁が明恵の枕近く仕えていたことは疑いあるまい。

- (6) 『漢文行状』は高山寺典籍文書綜合調査団編(一九七二)『高山寺資料叢書第一冊 明恵上人資料第二』所収の上山氏蔵本(鎌倉後期書写推定)による。

- (7) このあたりの事情については、田中久夫(一九六一)『明恵』(吉川弘文館)、奥田勲(一九七八)『明恵 夢と遍歴』(東京大学出版会)に詳しい。

- (8) 高山寺典籍文書綜合調査団編(一九七八)『高山寺資料叢書第七冊 明恵上人資料第二』(東京大学出版会)所収

- (9) ここでは主として次のような論考を参照した。

速水侑(一九七〇)『観音信仰』(塙選書七二 塙書房)  
同(一九九六)『観音・地蔵・不動』(講談社現代新書)  
五来重(一九八七)『熊野詣 三山信仰と文化』(淡交新社)  
豊島修(一九九二)『死の国・熊野』(講談社現代新書)  
根井浄(一九九四)「補陀落渡海の伝承と史実 死と生

そして救い」(説話・伝承文学界編『説話 救いとしての死』翰林書房)

- (10) 高山寺典籍文書綜合調査団編(一九七二)『高山寺資料叢書第一冊 明恵上人資料第一』所収

- (11) 明恵に関わり深い高山寺蔵『五聖曼荼羅』は毘盧遮那、普賢、文殊、観音、弥勒を描くが、それは『華嚴仏光三昧觀秘宝藏』に明恵自身が毘盧遮那の眷属としている五尊の組合せである。その成立事情等を詳細に述べた石田尚豊によれば、普賢、文殊は華嚴經に毘盧遮那とともに普通に現れるが、観音、弥勒を加えた五尊としての登場は見あたらず、やはり観音、弥勒を加える点は高山寺仏教圏の特徴とみるべきという。石田尚豊(一九八八)『華嚴経絵』(日本の美術270 至文堂)に詳しい。

- (12) 『続古事談』など。また六角堂の観音が歌を詠み給うたとの記事も『袋草紙』にみえる。

- (13) たとえば、聖徳太子の母后が救世観音が口中にはいるとの夢をみて太子を懷妊したとの記事は、『三宝絵詞』、『日本往生極楽記』、『本朝法華驗記』、『今昔物語』、『古今著聞集』、『私聚百因縁集』等にもみえる。また『俊秘抄』、『袋草紙』、『私聚百因縁集』、『沙石集』等は聖徳太子が救世観音であるとの記事を所載する。

- (14) 高山寺典籍文書綜合調査団編(一九七二)『高山寺資料叢書第一冊 明恵上人資料第一』所収の興福寺蔵本(鎌倉末期書写推定)による。同書凡例では『行状』よりも若干発展した形態を備えた内容を有するという。同書所収の高山寺蔵本『梶尾明恵上人物語』1オ(室町期書写

推定)に同旨の記述が見える。

- (15) 高山寺典籍文書綜合調査団編(一九七二)『高山寺資料叢書第一冊 明恵上人資料第一』所収の高山寺蔵本(慶長十四年書写識語)による。同書凡例では『梶尾明恵上人物語』の更に変容した段階を示すものという。宝永六年刊本『明恵上人伝記』(平泉泷沢注 講談社学術文庫所収)の当該箇所はこれに近い。

- (16) 高山寺典籍文書綜合調査団編(一九七二)『高山寺資料叢書第一冊 明恵上人資料第一』所収の高山寺蔵本(江戸期書写推定)による。同書凡例では『漢文行状』から語句を抜き出して掲出し、各条につき主として『明恵上人伝記』の文章等を用いて解説したものという。

- (17) 拙稿(一九九七)『明恵自毀の顛末と『非人』救済』(文教国文学三七号)

- (18) 河合隼雄(一九八七)『明恵 夢を生きる』(京都松柏社)  
(19) モロトモニアハレトラホセワ仏ヨキミヨリホカニシル人モナシ 无耳法師之母御前也 南無仏母哀愍我生々世々不暫離 南無母御前 南無母御前 南無母御前 南無母御前

- (20) 速水侑前掲(9)

- (21) 佐藤弘夫(一九八七)『日本中世の国家と仏教』(吉川弘文館)は次のように述べる。

高弁の(引用者略)創出した三時三宝礼の信仰が、「浄不浄ヲキラハズ」、在家の男女を漏れなく救いとする易行であることを強調する点において、法然の専修念仏と方向を同じくしていることが理解されよう。(引用者略)



高弁はかかる信仰を生み出すに当たって明らかに専修念仏を強く意識している。法然批判を展開する中で、在俗の衆庶を引き付けてやまない念仏の実態をまのあたりにした高弁は、〈選択〉に基づく専修を理論的に排撃する一方、念仏に対抗するためには、その特質を自家薬籠中のものとしたうえで、さらに簡便な行を創出する必要性を痛感した。そして、その模索の中から高弁が編み出したものが、この三時三宝礼の信仰だったのである。

(引用者略) 旧仏教における民衆化の胎動は、新仏教の出現に先行して既に始まっていた。だが、そうした動きは多くの無名の民間布教者の間で、庶民との接触の過程でなくずし的に進化したものであって、確たる教理的背景を持って自覺的に推進されたものではなかった。ところが、鎌倉期に入って出現する改革運動は(引用者略)念仏の存在を強く意識し、それへの対抗を目的としつつ、高弁のごとき当時の代表的な学僧によって主導されたところにその特徴があったのである。

(22) 高山寺典籍文書綜合調査団編(一九七八)『高山寺資料叢書第七冊 明恵上人資料第二』所収の高山寺蔵正元元年仁眞(明恵高弟の一)書写本による。

(23) 高弟隆弁が明恵の語ったところを書き止め、あるいは書き残したものを写しなどしたもの。高山寺典籍文書綜合調査団編(一九八七)『高山寺資料叢書第十六冊 明恵上人資料第三』所収の高山寺蔵宝治元年仁眞書写本による。

(24) 前掲(11)

(25) 『仮名行状』は明恵若年の出来事として、「カタワツキテ

法師ニナラムト思ヒテ縁ヨリ墮」ちてみたり、「面ヲヤキ損セムト思テ」焼いた火箸を「先ツ心ミニ左ノ臂ヨリ下二寸許ノ程ニ」引きあててみたり、「トラ狼ニモクハレテ死ヌヘシ」と思つて「五三昧所」に一晚を明かしてみたり、「癩病人」を救うために自らの「身肉ヲサキ」与えようとしてみたり、ついに志を鮮明にするために自ら「刀ヲ取テ右耳ヲ截ル」という激しい自毀の衝動を語りつゝのる。これらの記述は明恵四歳から二十四歳までの出来事で、上人の一代記という意味ではその発端にあたるが、外貌のみならず言動全般における明恵の「異形」を強調している。

(26) 高弟某(高信かという)が明恵の生前に語ったところを文暦二年以後編纂したものという。高山寺典籍文書綜合調査団編(一九八七)『高山寺資料叢書第十六冊 明恵上人資料第三』所収の高山寺蔵寛文五年頃書写本による。この間の事情については前掲(7)の二書その他、松本保千代(一九七九)『湯浅党と明恵』(宇治書店)など。

(27) 前掲(9) 速水侑(一九九六)、五来重(一九八七)、根井浄(一九九四)など。

(28) このあたりの事柄は『発心集』所載の説話などを思い出させる。ある禅師、妻子もあるのに捨身往生を願つて土佐から船出したという。はじめは焼身自殺をしようとするが、真つ赤に焼いて両腋にはさんでみたが大したこともないをやめて、補陀落渡海に振り替えたというのである。

(29) 前掲(9) 根井浄(一九九四)